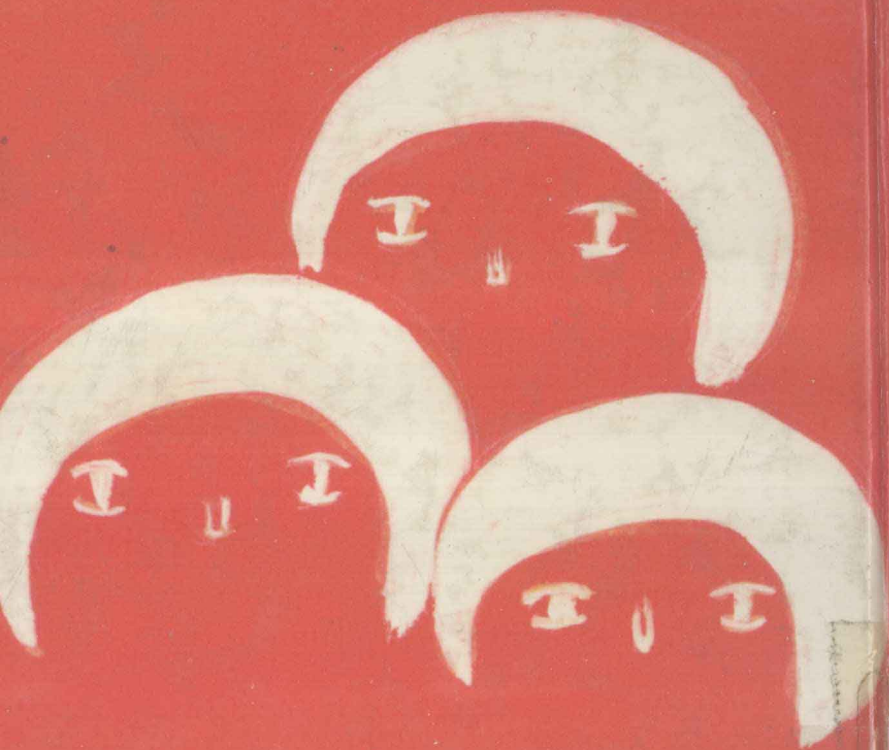


ともだち
ねむの木
そして私



*宮城まり子のふれあいエッセイ

ともだちねむの木そして私

＊掲載誌

「週刊明星」

昭和52年33号より

昭和53年32号まで

＊住所 ねむの木学園ともだち係

〒437-16 静岡県小笠郡浜岡町池新田7563-8

☎ 05378-6-3476

宮城まり子のふれあいエッセイ

ともだち ねむの木 そして私

1978年12月15日 初版発行

1979年3月20日 3版発行

＊定価——680円

＊著者——宮城まり子

＊発行者——堀内末男

＊発行所——株式会社集英社

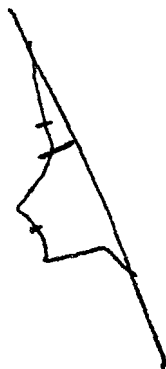
〒101 東京都千代田区一ツ橋2-5-10

☎出版部 03-230-6361

☎販売部 03-238-2781

＊印刷所——大文堂印刷株式会社

株式会社美松堂印刷所



乱丁本・落丁本はおとりかえいたします 検印廃止

© M.MIYAGI Printed in JAPAN

0095-772174-3041

＊目次＊

こんにちは、まり子です	6
赤いシャツの男の子	10
五年目の手紙	16
ある幕あけ	22
カナダより愛をこめて	28
全力をつくした、という自覚は素晴らしい	33
返事にならない返事	38
心ない大人たち	43
夏の想い出	48



ほしかつたハーモニカ	54
存在すること	60
ある秋の夜	66
小さくて大きな運動会	72
欲深の私が泣いたとき	77
らくらの日のロビーで	83
十年ぶりの休暇に思うこと	90
入院中のグチ	95
あなた、くじけないで……	100
やさしい人に	106
土の中は寒いのだ……	111
雪の子	117
大人も昔、子どもだった	122



ある成人式 ————— 127

春が近づくと…… ————— 132

ともだち ————— 137

あなた、お元気ですか？ しあわせですか？ ————— 142

トモコ・少女 ————— 147

みんな、ともだちなんですね ————— 153

三月のある授業 ————— 159

春のお手紙 ————— 165

天使が通る…… ————— 170

赤い服の女の子 ————— 175

やさしい鳩と子どもたち ————— 181

おともだちつて、なに ————— 186

ねむの木の詩がきこえる ————— 191



縁が多い日 ————— 199

あじさいの花の色 ————— 205

お月様はひとつです ————— 210

ブスカとヴェンソン氏 ————— 216

モスクワより愛をこめて ————— 222

『気がついたおともだち』 ————— 228

お守り下さい…… ————— 233

夏の伝説 ————— 239

花の妖精のはなし ————— 245

おてつだい作文集 ————— 253

贈りもの ————— 261

私のビュー□ ————— 266

暑い日 ————— 271



装画・カット 著 者
本文レイアウト 平 昌 司

ともだちねむの木そして私

いじりなむ、ねむの木

私、宮城まり子といっています。私は女優です。歌手でもあります。そして、ねむの木学園という、主として、脳性マヒの後遺症で、手や足に、ハンディを持ち、また、お父さんか、お母さんがいらつしやらない子の多い学校と、お家と、一緒にある、ところの園長です。そして、『ねむの木の詩』と『ねむの木の詩がきこえる』という映画を撮った監督です。そして、もうひとつ、製作というむつかしい、にがてなことも。音楽、これは、大好き。映画の中で、作詩も作曲もし、そして、唱っています。それから、シナリオもかき、その子ども達と一緒に出演しています。なんだか、なにが本職かわかりません。その上、なんとなく、たった四冊だけど、自分で書いた本を持って、又、絵の本も、たった一冊だけど、出しています。あっちこちの講演にいたり、ねむの木学園では、園長のやる仕事以外に、言語訓練や、美術の時間を持っています。そして、もっとも大切な感性の生活の教師です。

私は、いったい何をしているんだろうと、思いながら、いつもなにかやっていますので、私自身こまっています。そして、今度は、この週刊明星で、毎週、皆様とおしゃべりしたり、御返事をいただけるならと、かこうかなと思います。私が女優のくせに、映画なんか、撮っちゃって、それが、最初のは、世界中の国の赤十字社の集りである、ブルガリアのヴァルナで行なわれる映画祭

で、銀賞、そして、二作目は、自分でも、びっくりしちゃう最優秀作品特別大賞っていうのを、日本で初めてもらっちゃったから。もうそれは、女性では、外国の賞は初めての監督だから、そのことでも、又、本当は、ねむの木学園の子ども達のこと、子ども達のこと教えてほしいとか、保母さんになるには、どうしたら、いいのかなぞ、御便りが多いので、この誌上で、あなたと文通しようということになりました。わあ、長い自分の紹介だなんて思うんだけど、こんなふうにか、自分のこと、いいだせない本当は、弱虫なんです。そして、このページで、日本中の大人になるちょっと前の、そんな方々とお話をしたい、そう思います。大人っていつても、二十歳で大人です。二十二歳でも大人にならない人もいます。七十歳でも、子どもの心を、持った人もいます。つまり何歳でもいい、子どもの心を持った、何か考え、迷い、行動している人々と、お友達になるお手紙かきます。

どうぞ、よろしくなかくして下さい。今、私は、『ねむの木の詩がきこえる』の長期ロードショーと、ねむの木学園の子ども達の美術展を、東京の神田にある岩波ホールで映画、玉川高島屋で展覧会と二つ、同時に開け、毎日、おろおろしているのです。

両方、どちらにも居たい。私の映画を見にきて下さる方々に、一人、一人お礼をいいたい。又、子ども達の作品を見に来て下さる方々に、ありがとうございますとお礼がいいたい、これだけで、からだが二つほしいのです。

ねむの木の子ども達のこと、少し、お話ししていいですか？ いちばん、小さいたえちゃんは、四歳。ねむの木は、今年で十年目に入り、十四歳で、ねむの木にきた川北君は、二十四歳になりました。いちばんちいさなたえちゃんは、手も、足も不自由ではありません。今年の五月、ねむちゃんに來ました。小さなたえちゃんは、赤ちゃんみたいです。お洋服をきていると、たえちゃんのこと

とわかりません。胸の、真中に大きな、大きなたての線と、その側に横の線があります。つまり大きな心臓の手術をしたのです。病院から、すぐ、ねむの木に入園しました。お母さんは、いません。なかなか誰にもなれてくれません。ものを、すぐほうり出したり、わけもなく泣いたえちゃん、心臓にどの位、ひびくか担当の君野保母は、心配そうです。私は、手縫の、お人形をあげました。彼女は、少し、氣にいったようです。両親をもたないたえちゃんに愛をおしえたくて、お人形の名はマリコちゃん、つけました。たえちゃんは、朝も、昼も、夜も手縫のマリコちゃんを持っています。やさしくなることを教えたくて、いい子いい子してあげてという「マリコちゃん、イイコ、イイコ」と、頭をなでてあげています。或る日、たえちゃんに、ききました。「お人形さんの名前、なに」「マリコちゃん」「そう、私は、たえちゃんは、私の顔を、じっとみて、ちょっと、口をとんがらかして、横をむきました。だって、私の名前しらないのですもの。二月たってききました。「お人形さんのお名前は」「マリコちゃん」「そう、私は」「マリコサン」やっと、おぼえてもらえました。そして、昨日、たえちゃんが、お人形を、ばいと捨てたので、いいました。「マリコちゃん、いたいな、かわいそうだな、泣いてるかな」たえちゃんは、あわててひろって、いいました。「マリコちゃん、ゴメンナサイ」お人形の手も足も、毎日毎日たえちゃんが抱いているので、よごれてしまいました。「お風呂にいれてあげましょうよ。洗ってあげてね。石鹸できれいに洗ってあげてね」「イマ」そして、マリコちゃんは洗面所でたえちゃんに洗ってもらいました。あわだらけのお人形を水でゆすいで、太陽の光で、かわかしました。そして、半分、かわいた時、パウダーを持ってきて、顔も手もいっぱいつけてあげました。それは、カチンカチンの粉だらけの、人形になったけど、たえちゃんは、生れて初めて、やさしいことをしました。そして、私は、みたのです。たえちゃんが、お人形のマリコちゃん

の胸のところを、やさしくなでてあげたのを。そして、彼女はいいました。「まり子さん、マリコちゃん、ウレシイ?」
では、また、来週ね。



赤いシヤミの男の子

あなた、お元気ですか？ あかね、つとむちゃんがいきました。

「あ、つとむちゃんがいる」

メリケン粉で、パンをつくる時、粉だらけの顔して笑っているのが、ちょっと、うつります。クリスマスのシーンで、うさぎのぬいぐるみをきて、「ライネンモ、ヨロシク」といって、

うさぎ、うさぎ、なに見てはねる

と、うたいました。

白いうさぎのぬいぐるみみたいで、とても可愛い。『ねむの木の詩がきこえる』の私の製作、監督の映画のシーンです。

ねむの木の子ども達が、東京の岩波ホールで、上映されているのを、みたのです。三十名ほど、お家にかえった八月六日からの夏休み、十五人は、かえりません。私は、淋しいだろうと思って、夏休みの行事に、東京行きを、きめました。だって、玉川高島屋で『ねむの木の子どもたちとまり子——六郎展』（谷内六郎さん）という、展覧会を一週間やったのです。（大阪では、四月から五月にかけてこの絵の展覧会は、十二万人も、見にきて下さって、あら、私もいったわ、と関西の方は、いって下さるかも知れません）

それと、九月まで上映することに、きまったこの映画を見せてあげたかったのです。

つとむちゃん達、赤いシャツに、二百円で買った赤い木綿の帽子なの。あなたが、つとむちゃんに会ってみて、お顔だけみて、どこがわるいと思うでしょうか？

つとむちゃんは、足が不自由なのです。

つとむちゃんは、両親がないのです。

つとむちゃんは、五歳まで、病院だったのです。

つとむちゃんは、男の子です。

「あ、つとむちゃんがいる」といった子のクリスマスのぬいぐるみはね、まり子監督が考えたお金のまったくかからない衣裳なのです。

だって、女の子のはく白のタイツかりて、上は白いセーター、それを縫いつけて、毛糸でスキー帽みたいにあんで、首でむすんで、おしりに毛糸で、まんまるい、ボンボラサンをくつつけたのです。

つとむちゃんと、ヨシエちゃんと、マーちゃんと、ユミちゃん……一番、小さい子ばかりが、うさぎになりました。その自分をみて、つとむちゃんは、声を出してはさかしそうにいうのです。

「あ、またつとむちゃんいる」

小犬が逃げたシーンで、両手をあわせて、

「ドーズ、イヌガカエツテキマスヨーニ、オネガイシマス」といっています。映画館ではねエ、今、つとむちゃんのファンと、主役のやつちゃんと、としみつちゃんのファンが、あらそっています。

十九歳のお嬢さんが、「つとむちゃん、養子にほしい」といえば、二十五歳の方が、「私、としみつちゃんと、結婚したいわ」ですって。そして私、ねむの木の保母さんにいました。「つとむちゃん、

養子にほしいってさ、どうする」保母のお姉さん、私を、笑いながらにらんで「ノウ、ノウ、ノウ」そんな可愛いつとむちゃん。生れて、まだ一度も、「かあさん」といったことありませんでした。東京から、定期的に診に来て下さるお医者様が、奥さまと、お嬢ちゃんを、連れて、ねむの木に、いらっしゃいました。

つとむちゃん、すぐ仲よしになりました。夕方、その御一家が車で、お帰りになる時、つとむちゃん、私の手をにぎって、「まり子ちゃん、おみおくりしたいの」

「そうね」手を引いてお見送りしました。お父さんとお母さんにはさまれて、車にのって手をふったお嬢ちゃんを、みて、つとむちゃんは、エーン、エーンと、赤ちゃんみたいに泣きました。

うらやましかったです。

私は、おんぶしてあげました。私も小さい時、おんぶしてもらうの好きでしたから。私の背中でつとむちゃん、エーンと泣きました。

私は、うたいました。

ねんねんおころり、おころりよ、

ぼうやは、いい子だ、ねんねしな、

そして、私は、私が小さい時「まり子ちゃん」と母によばれたように、「つとむちゃん」とゆっくりよびました。

つとむちゃんは、しゃっくりしながら、小さな声で、いいました。

「あーい、おかあたん」

私は、またよびました。

「つとむちゃん」

「あーい、おかあたん」

「なーに、つとむちゃん」

「あーい、おかあたん」

つとむちゃんは、なんども、そう答えました。読んで笑ってしまう男の子もいるのかな、そう思うけど。あたし、つとむちゃんの気持よくわかるのです。

病院では、お医者さんはおかあたんじゃない。看護婦さんは、おかあたんじゃないのですもの。

お父さんと、お母さんのまんなかに、入ってあるいて行っただけのお嬢ちゃん。三人で車で、かえったお嬢ちゃん。つとむちゃんが甘えたいのあたりまえだと思うのです。

うしろでクシユンと鼻をすする音が、しました。食事の時間に、おくれちゃった私とつとむちゃんを、迎えにきてくれた指導員のお兄さん。

顔をみたら、涙がいっぱいたまってた。ねむの木学園のそばは、松林、そして、そのむこうが太平洋、大きな夕日が落ちて、紫色の空が、グレーになり、そして、夜になる夕方と夜の真中の時間、灯りのともった食堂のほうに、私は、おんぶしてあるきました。少し、後をむいて顔をあげたら、つとむちゃんのぬれたほっぺたがくっつきました。

「つとむちゃん」

「あーい、おかあたん」

そういいながら、あるきました。

ちいさなつとむちゃん、甘えているつとむちゃん、いっぱい甘えていいのよと、心の中で思いなが

ら、ハンディを持つために、淋しい想いをする子が、日本に、ほんとにどのくらいいるでしょうか。このねむの木のはんの少しの子ども達でさえ、私、満足に、お世話出来ない。私や、指導員や保母やナースや、いっぱい、ありったけやっても、しても、させていただいても、この位しか出来ないと思ったら、私は、女優のくせに、ねむの木学園をやって、よかったのかと、心配になり、私が、泣きそうになりました。でも、背中のつとむちゃんの涙は消えて、声は、明るくなりました。

「はい、ここから、あるく訓練ね」

「ウン」つとむちゃんは、ころがりそうになりながら、食堂に入って行きました。「おくれてゴメンナサイ」といいながら、つとむちゃんを、ちらりとみたら、もう、ニコニコ笑っておりました。

そして、つとむちゃんいました。

「おかあたん、はやく、はやく」私は安心して、お席につきました。そんな昨年のこと、思い出しながら、「あ、つとむちゃんがいる」と、つとむちゃんがいった映画をつくってよかったと思いました。だって、客席で私、十九歳位の女の子に泣きながら、いわれました。「まり子さん、ありがとう、私、美しい涙が出たの。忘れそうだった私の素直な心、私、とりもどせたみたい、ありがとう」涙をいっばいためた彼女は、私の手をしっかりとぎって、そういいました。私、うれしかった。だって、大人になって、忘れてしまいうるな子どもの心を、見てもらいたくてつくった映画なんですもの。

赤い帽子に赤いシャツの子が、並んで映画をみました。おとなしくして、人に迷惑にならないかと心配している私に関係なく、映画は進んでゆきました。「あ、つとむちゃんがいる」といった、つとむちゃん達と、一緒に、映画を見た日、私は、いっぱい考えさせられました。

赤い帽子、赤いシャツ、赤い靴、